

サンティアゴ徒歩巡礼にみる身体移動・記憶・ランドマーク—「文化遺産」とツーリズムをめぐる議論に向けて

土井清美（東京大学）

巡礼研究は、巡礼者の語りを分析することによって、習俗の全体像や社会関係などを明らかにしてきた。他方で、移動する身体と場所の関係にはあまり関心が寄せられることがなかった。

本発表の目的は、巡礼研究に、モノという視点を導入することにより、移動と場所の関係についてひとつの考察を与えることである。ここで参考になるのは、人とモノとの相互浸透的な側面を具体的に明らかにするマテリアリティの議論だが、本発表が扱うのは、一—手や口、工芸品など、技法の習得や交換の成立において重要となるインターフェースではなく——徒歩に伴う全身運動と、そこで生じる場所の諸物との具体的な関係である。

発表者の調査地は、ピレネー山脈を越えてスペイン北西部サンティアゴ・デ・コンポステラへ至る約 800km の巡礼路である。20 世紀後半以降、徒歩や自転車など動力を用いずに、ザックを背負い、靴ずれを手当てしながら、ぶどう畑や市街地を貫く道を旅する人の数は増大している。彼らは世界中から訪れ、世界中へと去っていく。道が整備され始めたのはローマ時代以前だが、現在はキリスト教の巡礼路として知られている。

本発表で焦点化するのは、道に散在するランドマークである。それらは、身体との直接的な関わりにおいて二つに分けられる。ひとつは大聖堂にみられるような様式美と規範にそった形象で、町の外から目立ち、遠方にいる人に対して方向感覚を与える「傑出したランドマーク」である。世界文化遺産に登録される多くの物件はこれに該当する。関連する代表的な巡礼研究には、大聖堂というモノが擁する権力の多元性についての議論 (Eade and Sallnow 1991) がある。

もうひとつは、限られた場所でしか視認されず見逃されやすい代わりに、移動する人からは反復的に現れるシークエンスとして認識される「局所的なランドマーク」である。これらは巡礼・ツーリズム研究では、重要ではないものとしてあまり研究の対象となっていない。サンティアゴ・デ・コンポステラへの巡礼路には、通過する人によって配された石などからなる不揃いなランドマークが数多くあるが、今日、積み遣されるのは石だけでなく携行されるあらゆる事物であり、その景観はときに呪術的すらある。それは多様な形状、色、重さの石からなる路傍のケルンであったり、自宅から持参した小石や家族写真、ハンカチなどが積まれた小山のモニュメントであったり、腕輪やベルリンの壁の砂礫などが埋め込まれた巡礼宿の壁であったりする。巡礼路を歩く人の前に明滅的に現れる「局所的なランドマーク」は、歴史のなかで異なる役割や形象をもち、天候や身体の動きなどによって刻一刻とかたちに変化が加えられているが、今日に至ってもなお、個人の記憶を集団的な記憶へとつなげると同時に、さまざまな行動を喚起するための手がかりを与えてい